





及古文  
一類四言

奇澗  
涼亭  
著



加茂貞吉刻

芭蕉談花屋實記序

今ハ一むく一此花舎某後廳ハ芭蕉公翁終焉の地なり  
時よりぬまハ本よりちれい多室とあふ星うつりぬれ石  
沉る多入ありある里のぬ元亨釋書曰人去境留境者也  
と誠なるれ此言漆川此史録ニ挿正成り戦死と傳ふ多  
歯と食しをり涙と墮さるれ族ハ忠義とあふぬ人の祭花  
屋の後廳芭蕉公翁終焉の實記とんを多けす、祭泪と拭  
るるる筆ハ世ハ月花とあふぬ人ハ祭ハ此四跡とく此記  
れつれくく傳り何ふあといけみ風雅の冥合といふは是也  
一ト去来先生此篤愛ハ一多るる生涯の事、實と書記  
一おれれゆえなりとそこのく舊きまゆい志とそくこそをへ







一と思ひつち終ひしと何となくよの日にし世のたゆま  
り思ひはちなきまの夢終りやけふつとまひせし  
惟然少ぬのうりしたるいけ裡

旅懐

世林の何ごとしよるやふらるる  
函云よのまりるし奇なりて神あるといふ人る世の  
他ふゆゑ其歎より思念するく自矣せし人のこせし  
雲ふ鳥の又文字古今未嘗有なり

惟然記

廿六日園女亭の山海経神話とてや谷食意は婦人なり  
禮とてし敬座法とては貞潔閑雅の婦人なり

突は伊勢松坂の人と我風雅は何事ふとありし  
とてし公園西惟中は伝ありは流花ふのりし内惟中  
と書せしむるを内あり風雅の名まをく高し惟中死後  
江ふふらうらう其角門人となる

白菊の目かたをみ見る塵ほほる

お葉ふ水と流る 初月 園女

五九人奇仙のり記

惟然記

亦九日芝柏亭小集を起し約諾ありしと数日か續  
る重食終しぬし常と何となくお席をくおぬりて  
秋ふかたは隣にるふ紙をる人ぞる

奇仙一巻油  
草紙のり



世に於ては病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり  
病は常なる事なり世に於ては病は常なる事なり

次良兵衛記

抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり  
抱もるるまゝくことめ其れは世に於ては病は常なる事なり

此の病は常なる事なり  
世に於ては病は常なる事なり



抄帳 在安入用品注取覽并  
在安入用品注取覽并

戊子月四日

一札一脚	一硯一面	墨一握 水小刀
一烟草盒二口	一帚二本	
一粉具五流	一梳六ツ	
一膳十人前	一竈三口	
一釜鍋三口	一火箸三	
一茶瓶掛二口	一火鉢二口	火箸添 真諭
一茶碗十	一茶碗沖三	
一薄又庵了三本	一茶罐	一口

一藥溜	一口	一研本	一本
一摺巾	一口	一炭斗	一ツ
一水囊	一ツ	一油德利	一ツ
一盃	二口	一水盃	一ツ
一水燈	二張	一縣行枕	二張
一挑灯	二張		
一白糸	一斗	一味管	三條 赤白
一醬油	一俵	一薪	拾束
一炭	一俵	一油	一俵
一紙	一束	一雜紙	一束

抄帳記  
次前抄帳



一塩

一律

右

一塵敷料

三五二朱 相液

右に在りて之を取取取

花脚便中より老師一河に教り少く惡字氣氣  
紙起居不穩之道不勝も之故自由と取取  
山堂前南久吉田丁花登に在り哀夜夜音聲  
拙小く宗信更之道更判ら見寓居と定山今  
物名別々山氣分と云ん元以極我に醫者も  
早く木と節子山極我にせよ成友との  
何山系別本並仰別名も世は是れ貴雅

早のりりおゆ山本並仰別名も世は是れ貴雅  
山不一

十月二日

惟然  
支考

去来抄

公卿及古上七

於、別名急、本並仰、別名も世は是れ貴雅

今物之收お達山下と為老師より心教分世刺之  
氣味之俄一二爰教中二十餘度、通氣是れ  
園女高下ら、箇、山、合、故、お考、山、一、概、之、中、











六日天氣陰晴まなまの初はつの食入けい新しん三さん者者前まへ秋あき終つひ夜よ寐み  
入いまをま初はつ終つひ夜よ寐みしたまふ山やま目めさ久くあまをま来きまをま  
くわくまま先まへにに野のゆゆ方かたふふ海うみにに盡つひゆゆりり大おほ井い川がは  
に吟ぎん約やくせせらら

大堰川波ふちり水みづ月つき露つゆ

水みづ白しろ濁にごりり京きやう色いろささててままとと大おほ井い川がはにに交まじりりままいいかか  
ららいいややおおももいいぬぬりり清きよ瀧たきののまま

清瀧や波ふちり水みづ松まつ葉は露つゆ

やや花はなささりり夕ゆふ栢かしわとと雲くもとと水みづとと同どう景けいありりとと人ひとののいいとと  
ままぬぬりりおおれれいい大おほ井い川がはのの白しろ捨すてををへへとと曲まがりり志こころののふふ

須々園女すずえん松まつ葉は露つゆ

白しろ菊きくのの目めふふたたててるる塵ちりももかかららぬぬ

やや吟ぎんりり是こゝ又また同どう景けいにに似にてて夕ゆふのの乃の節せふありりそそままなならら  
ぬぬ二ふた句ごとと一いつ句ごとと不ふ捨すてををりりてて白しろ菊きくのの白しろををおおももいいぬぬりりやや  
おおももいいぬぬりり言こといいふふまま末すえ洞どうととうう名な色いろれれががくく名なとと信しん  
道みちとと重おもくくたたままふふ者ものとと終つひ句ご三さん章しやうふふりりてて三さん章しやうか  
若わかくくままふふ沙さ庭ていのの中なかれれ山やま風かぜ雅みやびのの深ふか信しんととまま  
りりけけきき眼まなこのの物もの志こころををおおももいいぬぬりりやや同どう景けいととままららんんへへまま  
思おもひひけけいいとと同どう景けいはは景けいととままららんんへへまま思おもひひけけいいとと同どう景けい  
ありりままららんんへへまま思おもひひけけいいとと同どう景けいはは景けいととままららんんへへまま  
白しろ菊きくもも不ふ別べつににかかけけりりやや急いそぎぎにに我われららのの言こととと目めのの言こととと白しろ菊きく



と又のまき日暮き自ら之を懐こむべき源をたれは  
るのる諸今の園女ういまうあくくく多踏上の采女調  
ゆるとゆめいひる吟の言も妙の語も妙の世の人世  
と又のまの園々清言とあえんはかきかきこれ清をた  
仲の必<sup>も</sup>非<sup>も</sup>絲<sup>も</sup>與<sup>も</sup>竹<sup>も</sup>山水<sup>も</sup>有<sup>も</sup>清<sup>も</sup>音<sup>も</sup>とひひる絶唱もあ  
己れ園々二史よまてて自ら自<sup>も</sup>潔<sup>も</sup>やと大井清流は絶京  
と二白れるおとて威してはゆめりゆめりしヤセい  
師と機嫌よまててけり

去来記

七日約りふお熱れ眩氣あり日暮りく雨なり薬方  
逆逸湯小か減ましく入野と好くまふ園女ありて  
こく菓子等贈りてお次節を清取汁と之道小贈

る鬼貫来る去来夜夢しき還り園女可中渭川  
来る去来支考會叙を夜日業とのく夜日雨云  
初めりてあ暗るね入る人音と志つてはねは打乃  
もやま人かゆてあゆりはこい乙州正秀去来や  
けるい今夜師と泉下のあてあせしまを世後  
の内雅あかなるゆゆかん去来黙してあし  
我とそのゆふりりしき二日消息をけり  
くしゆきまいつり人こもあましまふやゆゆ  
今夜深静の火今のあおまもまふ山回復あ  
つらな滅後のゆゆとやひしそまふ人とまゆゆ  
枕よ何のあまを機嫌とまうし(四)中りるお次節







居阿多きまひしとつたり病を治す  
仰一のろふ牛のをもやみそふ 惟然  
神のる次このちうも也松林風之道  
日子ましとあひすの教あり雲霧乙州  
ホウしれやんるのや鶴は志 去来

大勢が集會ありけまいあつこひ且して師と愈の中  
けり木節去来小中らるる今物出深と何ん中に出す  
に動も哀れ命とんこも脈沖とあし最初不食  
滞より起りし泄瀉のれやも根元畔腎れ志のさ大  
志れ二痢疾あり故の逆逸湯之方あり松文加減し  
さうんと盡はやいと薬力やもかき頼とく治法

此化殿にもとめんとおもふ去来師小まめくも師曰木節  
く中むるれとといある仙方ありと虎口龍鱗と殿酒の  
やも天業以之くせへ我が悟道し何まい我呼吸は  
自にるるいひまもまも木節の神法と服せむ化小形も  
心るしこのまひる風流道德人これ間然まもるは  
支考乙州等去来小何くまやまはまい去来を治す病  
麻ね機嫌とをうして中て云古来あり鶴岩の宗師多  
く大期に辞せ有すいりね若匠は辞せはるるしと毒小  
ふよあもあふはしあまれ一句と海しとるい流門乃  
望まぬへし師の言まのふの教ありふの辞せ今日  
の教ありあその辞せ我生涯を捨し句と句と



辞せりし事ふかき若我辞せりといふと同人の  
此年浪いし捨ありし白の世に諸法從來常示寂滅相  
はきりし諸法從來常示寂滅相おきし是釋尊  
辞せりし事ふかき若我辞せりといふと同人の  
世あり其後百子の白と吐に世言なるか  
て辞せりし事ふかき若我辞せりといふと同人の  
口と潤ひふかき若我辞せりといふと同人の  
微妙なれば人ありし事ふかき若我辞せりといふと同人の

支考記

新入る事此處に野明為有る事柳と贈り来る消息ふ

今日まゝあはれやあはれや音信な去来乙州中談  
然と飛脚と美しうへりし師の中りきし師の云我隠  
道れ才とくまを弱る身の教百重れ花状おもひ  
親族ありとめけきと心修せし我は今大急事  
おくりかゝ頼中のすつたはれ家一のし思ひ  
きといふ今交大切におもぬとも沙汰ある事とのし  
師の意れ師のし老威んひ度教六十度ふおふ

惟然記

九日諸子れ取をうししとくまあるに夜ぬき又教具る  
の垢つりし事不淨ゆると説くことよき夜に石せま  
し中師曰我を地波濤のはより草と交味塊と托中



一多の流ととも流る身のかる身一も、悔れし心志がも  
未来もその友とちよんく——く鬼録小よしむじと  
受生れむやあり大草去来と名呼教目乃何とよも  
不斗案——入多吞舟に去せり名誨——た入

旅不痴をりる、指野とかけは

指野とゆくるるも——ゆるい流れある——二世に  
辞せ不何の流辞せ不何——するもの流病中の吹  
る架併かる生死の二た事とあふ並る——ふ生涯  
好——一風流といふも——是も妄執れ——もいふ是  
今いりる——去来言たの何の目、朝雨と暮雨のる  
もあつた山水野ものこゑもよきあつた——心身風雅

あ——さるなくかると河奥れ患ふつうれ終ひる——今執  
り流中に其風神の名言早と唱へ流あつた法門をふ  
のころこひ他門の同え末代れ龜濫るりやと流まを祭  
洞公流を照あるものこまとも人の魂成れさむ耳の  
ものは是とさうん毛髪これとあふ執るむ列流の會  
威慨悲想——多怖絶——多聲耳を——多師教  
一代遺教経る——かひりり好受のあつたをさしり  
交教志ねは

去来記

十日初雨をせり師教の明方をも交教志ねはひい——  
不照——まじりあつた——縁言えありとあつた志あつた



半多一木節首首藥湯と云々諸士おと  
會のめとまのまりせりねとすこまをぬ梨室  
とれそこたふ木節かこ割しほと頻りにのそ  
こまをゆえやむるぬれまめげまこ一汗味ひてや  
ゆふ木節云暉冒くるまれ一死ゆちうれおのり  
や云申れり別ふころめ入こちつれゆ冬日金  
一たるこのあ

惟然記

十日約まうく雨雨おまうあれく東武れ其角来  
くる是く東武の誰彼は傳しあふ東宮の序和州記  
州とあめりり泉品より海花少入りしとをくはと

師の言であをまことまはたありこまをまたつと  
漸にくけつるよりあふ病麻ふまぬりくは骨連巨  
治のる林は又まうくせまの且想ひ且よ海こふ師は  
あふまひたふまうくはく唯一泪くこまふ其角も  
云白なくさうつむぬおこりくと大草去来支考  
そゆの流次の間ふ根は山病性の始ゆとゆめりり  
教をく伽一あおまいよりしゆとも福の紫を  
已一ふ言のとま支うあふと師の言のさあたるあ  
彌とゆとゆふ人々ゆくこのゆりなく次一沙云湯取計  
一と疾く焚ゆけくすめまゆぬ申うと梳して使く  
あふゆりり朔日よあまこ来れ食ふゆれり去福にゆ



と云来腕ふるつー入るおーゆきと記

病中一の何よりすらあゝあふり云来

云来曰頼白と他ふもそをひる何ゆふのよと云来と云く  
師以慰めまゆせん深く業しつと云を頼ふ鬼  
またま惟然い前教正秀と二人あつて此浦園と  
いつそりて被りし一と想ひひびくる三ひびと終教  
へささりねをささるさつとと頼白多のあそこ  
ると云ふ笑ひのつと

いつそりつと浦園よきわい哉 惟然

おもひよる頼白と一た一を籠 正秀

一彦是とささるあつさまとばと笑ひねい師と記

こまつりつと、娘とさこのなりあく十日以来の具のあや  
有ける初志らまこはまの空やを信する日教さ  
いアさるる縄のおわく日南小群りあつるふと頼  
て縄とさし百ふ上りりあつるとん終ひるもあつ  
因りしりのまいひねや入病中の一のみあわい鬼徳  
（あふや信あふ入）まふ交考師のあふと滅後小一集  
せんがれあふと此二派の病苦を脱したふふ見え  
あつりしつ今日の機嫌よきふ業しつと云おゆん  
やと云来り中ささりりまの云来いの心も師の心  
と知りしつとゆえふふとあつと一はゆと中ささ  
この六師いふ生名圖らしつとあゆ好信を記今日御



こゆと見活をへり多法入娘——とおもふ中ふ出ぬ  
小迷ふる成閑せ中ていふんやと常——めの中事奇怪  
あり世後山陰あふくくより後あれ子く且言はと立——  
やと多うあ——く次乃る不逃立ちて支考もたき  
はものいひ出——て流世の前前面目と——あひ——  
りゆ：惟然ふおむし我ふ白ありそふ去給——といて  
志——く次乃る不逃立ちて支考もたき  
さきり支考ありれば師とわの字給してあひ——り  
給ひけり

心象とて菜飯

木節

乙州

この三の腐草  
又ハ花屋集  
ハ花屋集  
ハ花屋集  
ハ花屋集

うつくもある菜のもとれをきき文草  
吹井より流とまのうむ初河を其角  
つ：惟然吟色——れば師文草うと今一度とのそ  
給ひら文草あふまきこりいづてもさひ——をり調  
きり面白——と志をきき——こきもて芸給ひ中り  
みつ不かりり機廻れ廉——はとあひひるふ木節又  
徳成ゆら経神ふ足ゆれば其角を故とふ木節云  
病小余申れ証といひるあり大病中絶食あるふ俄  
余のまむしゆらる悪症之死ぬ遠きふゆら給ひ  
アさいふら者さめはあふふ教中より又云熱  
性朱ありとねほふらり顔色去の——く又給ひ給







中大のひとくふえを——合掌もた——く観音經とよま  
しうがまをうりて一息のくふいも遠くあり申の刻とく  
埋火の何きありのさしうりてく流るる抱きまぬ  
せたるふありうりてさるる寤入流ひぬとおもふ初やふ心念  
か——る終ふ属贖いつれ流ひりり時元禄七甲戌十月  
十二日申の中別沙年六十一歳あり印刻不淨と流る  
白衣に長櫛と納ちぬせ其教を以て舟のあ伏え  
まるる山供——なる具人くわき其角去来本草乙州  
正秀木節惟終支考之道吞丹次師玄清ゆ主人  
花屋に在馬つ京前お流道ゆゆ長櫛のあ後た  
名とともすれ念佛誦經おもひく——供養——せ

八幡成るる須敷とあ——とゆをなせらるる僧本由はり  
たまおるる舟のゆをなれいゆさやまゆ京移りれともり  
そりお流おきり——あねちる京櫛つくとまより根  
寺は通るりかり色さふゆそり——やふふ十二日これゆさ  
わら大津の乙州の宅不入き——そまりりり乙州に伏えり見  
まらぬいりて帰る流るる掃除——まよあ体浴れ用意  
此体浴ハ之道吞丹次師玄清ゆ沙髪の延ひさせとま  
一月代小文章法師まゆれりり沙法衣淨衣等ハ  
知月や乙州の妻縫るる淨衣白衣ゆまらるるを  
流るる苦ある流るるゆらるる事ゆらるるて京制の衣ゆ家  
まらるるあねてすゆらるる事ゆらるるをりれい知月尼の











悲志心付し小春の世も多かりく天の晴く月  
 清朗とて多し湖水の向りてや波り名も一粟  
 津乃もつふ吹起るるを世の風くもおもわれ月も  
 おもしち紅との赤い色れあるものさびしやわらわ  
 といふのあはれなるものなりとていふ橋の渡り  
 心も紅も愁人のあり小胸のせむり涙は流る

支考記

引道寸香語

雪月魁魁風花精神等閑一句放鳥動人天  
 嗚呼奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雲一輪  
 明月五十二年一字不説

各拾香

丈草	其角	去来	李由	曲翠	正秀
木節	乙州	卧高	惟然	昌房	探芝
泥豆	之道	芝栢	北玄	尚白	去芳
卓袋	許六	丹野	風國	野童	遊力
野明	角上	胡故	穉葉	雲椿	素聲
回鬼	萬里	識々	這筆	荒雀	禁江
木枝	扑吹	臭光	支考		

諸國代香不記

石の外遊に中いり及てと京大坂美濃尾張伊勢  
 其外國より京和ふをりある法皇のく三世値遇



の海とありこい我りくや香の向も其教何人の子  
教志れは境内狭けりこい教あり入りこふ人い裏いぬけお  
やうに志つこい聖田れ川野ふれつるれ焼香のくこい  
へより書ぬけこふこいこいこいこいこいこい  
却とりけふこ子の時とふありふある香のこいこい  
の通り木曾殿の古のくこいに埋れサこいこいけり  
十五日去来其角をこいの膳不の津の今朝疾訪こい  
こい兄とこい去りこい何あり多卵塔とこいこい幸の塚の  
こいこいろふ年ありこい柳ありこいそのまふこい御名れ  
形んとこい多枯の芭蕉はこいこいこいこいこいこい  
茶の末れ今と加廻りある花とこいこいこいこいこい

牛もく恒のいまこいこいこいこいこいこいこい  
廣こいこいこいこい生前小こい名豊世草原の海ふこい  
支其徳美芝の絶頂小話小人丸赤人のむこいこい  
さふこい末代の人ふこいこいこいこいこいこいこい  
世世再形存付也 沙のふこいこいこいこいこいこいこい  
後こいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい  
中こいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい  
沙のふこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい  
魚こいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

市島 聖芝夏  
不丹 菅稗  
三香 猪推  
十香 羊残  
中島 去常

十月十日 柳香 立  
松尾もたれん松  
新参の松もたれん松



11

公羽及故上畢

公羽及故下終焉日記

十六日乙州高下小集會一多義仲寺住持外僧  
徒小禮佛送物木の沙汰おくりよ

此教とて乃、此苦勞ぬぬと日名兄師出進之  
直此手西より記は後之卯寺納ありて中  
該及且亦伴賀分一向進去も此とて不常  
極此態与人指立中及有物更一人と名目少憚り  
故此世名し加中及そありて及以後合及又以後

日七カニ各法園達中延敷云々申物出意前  
出遊憚能得而約具以は後分らるる沙汰書一記  
一章貴雅而書分及者案くの中法る此今  
此物名あり、其指と面より上り此上

十月十六日

去来

一々角莫雅

此出箱取續心書しつりてある、此一章常新  
こそ筆取相とよ今日て流若出集會兄師出進云  
く此書此記と且土寺地と外と、此定この成る又  
此加とて、此又通身指と立合中、此物り此書此書  
早書此池集、この山此人今日と、此初之曲翠平子始



此正秀沈是日公は足跡の旧法に如任居るに  
 推しあふ本も兄山第の一字一石塔の如く  
 諸仕並則此今出立は信の多し山第の  
 あり山第の如く和古絶ありて主人法風子  
 下り山第の如く和古絶ありて主人法風子  
 山第の如く和古絶ありて主人法風子

終正秀記指尾集

一 沙汰正記の如く和古絶ありて主人法風子  
 今九取あり兄下り山第の如く和古絶ありて主人法風子  
 兄如惟然支考り覺書句論山第の如く和古絶ありて主人法風子  
 去り山第の如く和古絶ありて主人法風子  
 お互つありて

次正秀日記の如く和古絶ありて主人法風子  
 後回篇目にて進下り

十月十六日

其角

去来英雅

- 十七日九州亭
- 一 志五上人 一金 一両
  - 一 御鉢米料 一両 一両
  - 一 御供養米 一両 一両
  - 一 御茶湯料 一両 一両
  - 一 御弟子銀子 一両 一両
  - 一 三升寺常任院出弟子二人 一両 二両

家来流三人 銀三両



御物

今長崎より

- 一 出山佛一鉢
- 一 鐵如意一本

佛頂禪師より附與長押延元凡一尺九寸位頭萬葉形金箔木曾寺有文草附

- 一 銀音徑

小部

- 一 紙縷袈裟

佛頂禪師より附與

- 一 被風

- 一 銅鉢

一口

- 一 木硯

檜木より附與

- 一 古今集序註一部

- 一 百人一首一部

- 一 新式一部

- 一 奥之細道一部

- 一 御笠一部

- 一 管蓑一部

- 一 御杖一本

惟然小附と云ふは、  
此の今昔集の増井山  
の藤風羅堂に納る

右紙縷袈裟より附與七尺八寸と云ふは、惟然小附と云ふは、  
此の今昔集の増井山に納る

御頭陀

中三杜子美詩集山家集外、後猿蓑と云ふは、  
哥仙三巻巻四の四五吟程外ハ此書抄の及故本入別小紙包  
と云ふ布製五寸ハ六寸許上包小杖細布と云ふは上法風と  
又外小和歌の古短尺二枚松嶋蛙澤ノ信二枚















いづれもいふ事なきに云ふは格別と外に依り果て  
義仲寺に古納りたるものなりと云ふ事ありて  
仁王なる山形ありて中宮に於てありて  
一壽貞子次神満子今度信切に骨打始り  
半威入の形ありて山向論著代に志し其元  
流よりお仕旦中より一日成りたりと帰る様  
に似入のなり  
一お妙居と云ふ古衣の装束に下遊の形あり  
外に古衣の装束に似たりと云ふ事ありて  
山向論著代に志し其元流よりお仕旦中より  
一日成りたりと帰る様

十月廿二日

松尾中兵衛

命活判

晋其角換

向井玄来換

卯吉中換

巡遊山花脚乃遠ら臨中され誠痛不  
るいかに山の中一りありてその山ありて  
山と

別格中より芭蕉死するより拙と云ふ公同は  
山中達山知ると甚疎きに如飯より有辨在







お初作のりあき暮あけのちのちのち  
一万のちのちのちのちのちのちのち  
十月二日  
雲尾中島

義仲寺柳

覺

- 一 御布施 金二百疋
  - 一 御仙米御沙米料 日二百疋
  - 一 御茶湯料 日一百疋
  - 一 御布施 日一百疋 松尾二松中
- 右

以花札侍山言中山益山清雅もあまの夏許  
左山中然少孫近化のり奈方小言山  
小成り中少言言料とあ唯慈涙と  
取阿久次一勾安方中並あ山孫もつり出山

十月十日

新法

去来雅文

若きより来く孔教也一冬の山  
世外流國く帛儀取直和整雜取除く

頃日古芳卓袋為御し仰中言言  
外所今日言人揚之中山久以長  
一山常未ウ使











予義の且又志願上人の正答に義と云ふは  
其の如く又拙志方々著く山形への義名併我  
ふに由りての如く信じての如く風流中  
小形物暫と欲り山境界に在るもの如く是れ雅  
書に似ての如く雅方にもある山形中  
通の書にも成る拙志は紙巻にも自して信  
此に漢才の如く信じての如く未だ拙  
元に通じての如くはともして又更と  
並つたりと仰ぐ其の如く在るに芭蕉魂魄成る  
是年信ち其方の如く始末と承りて休心修徳  
十月亦九日

松尾忠房  
命漢列

向井去来撰

鳥羽文臺 一聯墨塗

長き尺九寸幅を尺二寸高四寸板厚三歩筆及  
尺を寸

右と師嗣お取之印 季吟の如く先師の如く  
此の如く重器に今又拙志の如く此の如く  
此の如く重器に今又拙志の如く此の如く

元禄七年甲戌土月四日

向井去来



松尾羊在馬房

但三下不

此處も小松尾に一ヶ所あり  
摺四角う角板にあり

公孫及叔下畢

片歌二夜同言序

ホト——宝曆てふ未れ春。吸あ。唐之後ち。りし。  
越るのくくにえむと。毛ぬの國ハ二ねを曆と。やまひは  
うま。あひる。アに。為。ア。た。ま。ふ。た。久。く。り。ぶ。う。あ。も。ひ。  
み。と。も。も。り。く。ひ。ま。い。り。も。ほ。に。こ。ま。言。あ。ま。こ。こ。  
い。も。か。い。も。て。く。と。ぬ。ま。に。つ。り。た。ま。と。語。か。い。い。と。た。や  
し。と。る。む。さ。ハ。河。の。中。か。い。つ。け。と。た。あ。も。も。え。じ。人。め。あ。は。え。  
といふに。ゆ。を。と。て。人。に。弟。そ。せ。言。の。ま。た。く。れ。語。か。あ。  
冊子下ひくとるれ。又二夜同言とハ。ま。つ。つ。で。い。う。つ。け。は  
名。あ。り。

上毛野前橋國府

四云序末論記



○素海間能活てふよの興まはらふは河のうらそ

○綾言 俳諧のたれは富にいつれの河よりとつたを

あしを今發うふよの興まはらふは我志ねり

おもしろ旋頭歌のとはと本にして一向とせむは日か武言

拳志語ふあれこも旋歌の詞と羊に一向とせむも

古より紀よあるちとるこのおこせこ・氷ぬ川は歌あへ

の名を序あとりふ

抑いにしへの歌は難もなく別てゆるまなり・このゆゑに志

成ゆらり・ひと演ゆもの・名をべくおとりふ・其詞の数は

ふまるといふ中歌のゆらゆらより・長きと号て長歌や

ひ・三十一言と短歌と・三十八言と旋頭歌といひ



りり。片歌の名もあらずと志願へ一若後の人を号す所也。  
志願は号するに後少く。云先あるは片歌いふ所は  
とまてあく。師は冠しなく。皆とあり。後とあれ。そ  
一先。旋歌も種歌と。名あれらるやあれり。ひま  
其先おれもつとと傳へく。かゝるものと。いふも。かどかく今  
やれ。海ま一れ。まてにくた。ひや。あると。能治と。ま  
いひて。さる。れく。よ。こ。あ。あ。に。ま。な。あ。と。く。い。と。下  
むきに。家と。ま。る。い。あ。ん。ま。あ。ま。古。今。集。に。能。治。體。と。名  
つ。あ。と。撰。ね。る。歌。あり。ま。歌。あり。く。お。し。と。異。に。ま。  
今。あ。の。片。歌。を。わ。く。ま。歌。の。所。り。按。ト。来。り。と。ま。る。へ。く  
の名と能治や。ま。ま。能。式。ま。ま。の。連。歌。に。あ。る。あ。る

い。別。に。俗。談。平。話。と。一。と。能。俗。の。家。と。ま。り。と。年。久。し。  
近。世。英。法。の。支。考。あり。と。清。和。名。傳。に。源。と。ま。る。能。治。乃  
文。字。に。理。と。つ。ま。と。く。洞。源。と。い。ひ。法。笑。と。い。ふ。い。つ。れ。ま  
漢。去。の。例。に。あ。る。へ。ま。ま。支。考。編。と。ま。る。ま。ま。と。の。い。  
遠。へ。は。能。治。の。文。字。に。ま。ひ。あ。る。其。源。と。ま。る。集。と。ま。る。ま。  
ま。の。俗。談。を。撰。び。る。の。遠。へ。は。ま。ま。と。ま。る。ま。ま。能。治。を  
り。と。唱。え。る。と。お。は。し。

○編同其古の片歌とまじ  
○後言いに人の倭書にあるもの多し。こに一首二首とつけし  
波の神歌の和岐帯能遊多由久毛五草  
多知久母古今片歌明題集











時に御火焼り侍老人は御教と續く

迦加賀那倍氏用迹波許許能川

比迹波登上り加まら

今そに水方の三鬼と解む

迹比婆理部久波の冠辞をさる部久波と改定して甲斐

の酒抄の宮ふり給ふいくくの口敷をたもつく寝

ふんとあふ意こたのつゝ困勞目とよまれ侍る御あり

ある御火焼の老人は教に迦加賀那倍氏ハ考へて給ふも侍

能く堅まをこ。又居並てのこつ御あり。由は指と居とは

こに指と居とがみ算ふ侍。且云ていつ十日。今給

まふ御波。水ゆきと給とよて算ふれ。九教あり

是より先にやたえらる。又萬葉巻は八に尾のよの御

佐保河之水乎塞上る殖し田乎

大伴宿禰家持元續夕

新流早級者。獨宗保候也

おれ今やふゆら。水と塞上る田殖はる。其後せ

の教人水例おな。ひ上れ夕を考へつ。お下る

とおしと上の夕とつ。これ水例こ

○梅岡連教のおおれふり。あゝるべ。又主水と

續く考ふ。ふとのほまふり。古にあゝる例ありや

○後言水例古にあり。今ふまふり。あゝる連教にあゝる

されどまふり。難言といひつ。ふと古教にさる。物語に



俳諧をきこひしはふけき。そ源と俗法ふり。えんはぬ  
こもといひ續く。これらぬふ見成貴<sup>ツキ</sup>。思ふにけさゆ<sup>ツキ</sup>にわさゆ<sup>ツキ</sup>にわさ  
いふべし。おろし。こまこと思ひ思ひ。今の人と。か  
にこそ法を人し。真あるまに倦く。なほは雅心<sup>ツキ</sup>とまふ  
へし。と年月世流さふと。巻くふ物と。あ  
かど。いけ。其申ふ言と割<sup>セ</sup>長し。あつて世ふり。知の俳諧と  
ハ異<sup>コト</sup>あるべし。今人夫に志とゆく世流。あつてまは境<sup>ツキ</sup>。  
いふ。いつまごの法<sup>ツキ</sup>と。本と法と。俳諧の名目と  
うつく。ま<sup>ツキ</sup>と古に。あつて。今この巻と。やふり。あ  
つて。あつて。梅ふけに。あつて。巻は唯戲言と。あつて。真ま  
のこ。か。あつて。えの。あつて。あつて。は。えと。えの。え

とまきほくといふべし。設けつてふもの。眼とあつて。あれは片歌及び  
續白をれむ。全く古に。授けり。ま。其體の今極める。外台の  
び。それの中ふ。神と。詞あり。こま。あつて。巻において。こま。例  
あつて。又。信後。あつて。ま。い。と。真あり。信と。あつて。感。あつて。  
い。こま。凡。書。て。ふ。との。面。あり。裏。あり。字。を。或。い。ま。極。て。よ。と。  
中古の人。ま。ま。て。法。式。と。い。つ。つ。た。ら。ひ。む。お。は。え。さ。れ。は。法。  
と。あ。れ。る。人。に。あ。つて。は。抑。棋。の。圍。に。あ。り。は。其。法。を。式。と。い。ふ。に。  
して。外。より。こ。ま。智。の。及。ふ。ま。に。あ。り。は。され。と。其。ま。極。め。  
して。信。く。其。智。の。用。と。あ。り。は。俳。式。の。多。る。は。ま。あ。つて。こ。れ  
と。信。く。これ。と。論。ま。と。ま。と。式。の。ま。に。あ。つて。外。の。目。と。あ。り。は。  
され。と。連。歌。の。式。は。中。に。扱。は。り。文。字。と。二。句。を。ま。ま。極。め。是。は。ま



















における羊は後世に毒とあがり式は後世に毒とあは

。痛問審にすむ

。後世に俳諧了ふもの。廣くゆりまは芭蕉の後ワルカニユ故に芭蕉にゆりまは人なり。家におりおのゝ作はとる海之言は制家も芭蕉には半同あはし許しと。芭蕉の毒とあはせるとを知らば芭蕉は隠道の人なり。依り其末流は隠道とこのこと。序方として隠道のおとよ。そ等の流をくかうし。芭蕉又せふすよ。されど世の俳人芭蕉とて祖とまふ。あに芭蕉の毒と奉て海内の際とるゆる。何れ也とすむ。芭蕉にゆりまは標を序方彼の外にあはるとにあちくむつし。死句とも多あれど。家にしりく。等々く。まじりの五言と

奉ゆとすむ

高水に下畧

水文字流氷と出はむもあれど。そいつれは河と河となす。流氷も流氷と出はむもあれど。そいつれは河と河となす。と。並てはや。氷をふれ又平流あれど。字流氷年。令腐霖雨之始水逝。源本積氷。お因思毛。糸母。

と馬葉集にも河の例あり。又あへく流氷と氷をふれと。是とす。事にもあはく。心とすむ。

高水けり同

高敷りり。高敷りり。いつれに。河とあはば。後の毒ね



河に流るるどいひにありけり

去くれぬや日懶性や日愚にゆく日

かろいのみ言とくにあらん。下にいふは雅玄ありとと。  
一ふれ烟となひ魚紙や。まじり是等の教ひるはえいふ句と。  
まじりか言の割家とあらむものと。ゆゑに河と。河とあらむと。  
ゆゑに。あつたよと。ばのあやうと。河とあらむと。ゆゑと。たに  
挙ゆと。ゆけ

老下み言

山の尖

門の牆

指古々

御遷宮

ひらけり

三布ゆえ

紙燭うか

小ちつぎ

麻角茶

御取紙

二重つぎ

やぬれ家

別荘友

まじり野

男のね

背戸の紙

出まゝか

形端六

料理の間

三月紙

茶みず

てあか

御

家世れ

あゝる

世をて酒

背中つぎ

酒みず

脊の茶

是の中た。小ちつぎ。水端が。男のね。ちと。何の難あ  
じと。か人まじり。小ちの河のつぎ。ちと。何の言割家とな  
さ。何の。か人にあて。か人。水端が。男の。二つ。は  
河を。か。男。は。に。流るる。















あうくと日づつあぐも如の風  
唯深き障にありとまふ人そ  
夏草もや兵士どももるの何と  
むんやる曹のふれまをくひ  
荒海や佐渡に横いふ浪漢  
あはるをありあてのし一室と川  
又月や六日と春の夜おひ  
柳火列や暗れ才ゆく旋目あ  
山里に美田本道——梅のたを  
ともかくもあぐもや春の枯草花  
真なるや柳のしつれ管はあ

山形何やうあ——  
スミレ ククザ

昔ヒギ子コらラさサうウにニやヤまマくクふフ絶ツ頂トウが

そ等のたぐひ外にもあはぐらう。夏におはえを  
静回芭蕉のふとるふに。古きさると梅。そあも  
のまあえふ。人の思ひ入るまとい。黒ありと。あうあう  
。後春さ。はれ情のあもを。誠に申はせの所放れ。あも  
いりじえあむえふ。あに

小コのノ画エのシ柳リウ源ゲンやヤ雲クモ下ゲの家カ

るルはハぐグさサ——コのノ妙ミョウ志シ揚ヨウ

夏ナツ草クサもモ時トキ一ヒトつツあアはハれレいイこコりリが

月ツキもモ——ツのノ権ケンいイるルとトちチあアうウ



涼しきと家宿に〜と移りて

たそ〜馬唐花のほろ

かゝる境に〜して世の人及ぶまにあ〜び

壺ユウカホ意や杖の劇に減燭とつと

世たるの漫ニタリにいし拵いふよあに何〜か〜と執と細意授や  
あ〜かあ〜とといひ

○薄問 家やびと〜とも其おもひも〜人凡ゆる〜ち也れ  
白とま〜と唐海の白と〜道む〜これ本様あ〜とまゆる白と世の  
くあれとあけ〜と名白と称と〜干辨ワイタマ別をま〜

○後言 是等のの白調とま〜と世ゆえに〜と〜と〜と白と意

の裡ウラと〜とた〜〜と世はせむい〜と〜と〜と〜と  
○薄問 干調のあ〜と〜といふ何

○後言 あれ〜と自れを〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
様あるの〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
法ゆせよ調おも〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

○薄問 世に約言をもて月とあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
○後言 約言の意の調と月には〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
ゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
らび〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
○薄問 十六イナヨヒ夜タナヒ十七イナヨヒ夜タナヒ十八イナヨヒ夜タナヒ十九イナヨヒ夜タナヒの〜と〜と〜と〜と〜と  
月ツキの名月ナツキに〜と



まーや

〇後言古におして何あふも何事とされどいふよみと云ユラ相縁ヨバ心定  
 の言ひて既に澄みおほまらゆりこし海と中世の妙法に  
 ありて。十六夜イサの月といざらふ月と。十七夜とてたちまち  
 と。十八夜とあまちなれと。十九夜とてふしあちなれと  
 是をいにて一八の事にもあはれ。既に今やうの片方には  
 名月ふことさつうた。是等名月省くへうと云はれと  
 月の言ふと入れさきばかりく。一も一古の序方にあり  
 くと。月信ともあむとあはれ。むらさきの月小考とあはれ。  
 〇今海世の中に  
井ノ子ノツキ 井ノ子ノツキアカシトユカ ユカユラ ユラサレハ ユラサレハ  
 唐待月開乃門従者暮去者

〇萬葉集にもおられなくいふ事あり。十八夜イサの月  
 〇あはれいふえむ。されど月名の名をさるうらふ。たちまち  
 〇ふしあちなれとあはれ。古くもいふ事あり。萬  
 葉にいたちまはれの月と。されど意のこころみ。一と  
 月とつれいふ事な。源氏の物語に。十七日の月と  
 云あり。されどいふ事。後世の事と云は  
 べ。又廿日の月と云。あまの月と云。又  
モキノヒニイテニ 十ツキノタカニ  
 十ツキノタカニ  
 十ツキノタカニ  
 〇十日日出之月乃高ツキ高タカ也  
 〇ともよみ。あはれ。月ともつれ。十日と云。月と云。後  
 世の俗話に。あはれ。月ともつれ。十日と云。月と云。後  
 〇十日初月と云。の初月と云。其の月は。後世あり。







と同一の蓋推歌歌乃らよぬ人の歌にゆへびおぼ  
二曲ハ若くするの人おぼこ世の序歌と漫る俳諧と何  
う處と尋ねられおぼ何う處と尋ねたのおぼくづ俳自  
弁せよ

○梅岡俳諧の名で読む序歌と唱ふゆに及てハく白のさ  
ぬと黒にまじり

○後言る事ナスコトまよ一とかりくも。かろくも事とた  
りよゆゑに是まよくも言制セイ大にまツクせる。今やの序  
歌ふもの何ういふよ。時はまたに依る處一

○藤岡國風まよふ事何せむ

○後言る一國風に依るべし。まよく國風のもろくび人の生

災ツキ等々くびまよくと好む人あり。又新シニの作と好む人  
又よやりのまよのじんあり。又ひるありと好む人あり。いさよ  
時オモテ面のおと一いつれも風にも好むに依る。今も好む  
而に依るもやろく妙ある境にもまよべけれ。オと挽ウラめを  
曲く。風信をかつじとりふハ大におへのおつふといふ處一

○梅岡文章まよふ事いふ

○後言文章まよくと外はな一唯ちやまとい文章まよと依る  
許六支考の業。俳諧の文とく。おのりく。まよとまよと依  
まよつ。全くまよのまよの文にゆへび。抑文の整くゆへる。依  
唯其このいまに依るべし。おにふ今やの序歌に古にと  
り。中右にと取。ゆへを文章まよの詞もまよとく。古まよ



より、中古にもさういふれと一編ヒトナキに、古の詩カありと云ふ  
人の文章もまゝと云ふるべし。今や此詩カ。千詞の平  
活あれといつれも出而あはれ。昔の昔ツキヨト活あれを今の昔ツキヨト活は古の  
昔ツキヨト活にして。たゞを人唐の集れ長歌に  
久有者ヒナナラハ今イマ七日イマナシカ許ガカリ早有者オカラ今イマ二日フツカ許ガカリ  
將有者ヤル今イマ二日フツカ許ガカリ

世たる今の昔ツキヨト活にははれを。今の詩カあり文章に對する  
詞とあゝんと云ふ也

○梅問今や此詩カ。音のまづふと云ふ。文章は洲のま  
田ははらひ

○後言前サキにさういふ。訓といひ。若といひ。聊シカドふらるるは似

ふれど。當日のむれ河に。又に異國の音ナと云ふ。  
たゞいまり詩の詞に。鳳凰とと。孔雀とと。又セシタチ又蓮セシタチとと  
別カクカヤと云ふ。あまのまゝと云ふ。又文章は詞カありは  
自在に千詞にや。さういふと云ふ。物と別カクへくも。是れと  
文とのまゝいひ

○梅問其昔ツキヨト活にはあゝんと云ふ。此れと別カクにさういふ

○後言前サキにさういふ。訓といひ。若といひ。聊シカドふらるるは似

それ詩カあり。みまび。さういふ。さういふ。の詞も集の用あり。詠  
しゆゑに。千詞は。さういふ。さういふ。今もさういふ。さういふ。さ  
りりさういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さ  
かくさういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さ  
かくさういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さういふ。さ







目にくまらぬの流るる雲うの  
権佛や流るる分る根茎耳と花れ

東奴  
星露

途へゆくやするあらしは  
探策にふとせせく新葉ふり  
熱心や目のあふ人並とゆく  
徳ひくわや習ふ、漆の志と流

素輪  
今今今

藤急と忘れく並ふゆく成  
湧く出さやする寺あま山はら  
吹飛にて杉に一首や山さく

破了  
青藍  
東起

あはれはちねあまおほく

さいゆぐりうきり夕にいとあ

紅の神も伐るるをまら

吸露菴



如後目錄



